〔令和三年度研究会活動報告〕

モンゴル佛典研究会

研究会代表　阿部　真也

本研究会は、モンゴルの仏教について様々な角度から研究する事を目的としています。現在は、二〇一七年八月の遼寧省瑞応寺調査によって研究会メンバーが発見した新たな『モンゴル仏教史』の写本の内容と価値を明らかにするために、そのローマ字転写・翻訳をおこなっています。ただし、昨年に続き本年度も、オンラインならではのメリット（例えば普段参加できないメンバーも参加できる）を考え、順番に一人ずつ発表をする形を取りました。これまでの研究会の成果は、「大正大学綜合佛教研究所年報」の第十八号（平成八年三月）、第十九号（平成九年三月）、第二十号（平成十年三月）、第二十一号（平成十一年三月）、第二十二号（平成十二年三月）、第二十三号（平成十三年三月）、第二十四号（平成十四年三月）、第二十五号（平成十五年三月）、第二十六号（平成十六年三月）、第二十七号（平成十七年三月）、第二十八号（平成十八年三月）、第二十九号（平成十九年三月）、第三十号（平成二十年三月）、第三十一号（平成二十一年三月）、第三十二号（平成二十二年三月）、第三十三号（平成二十三年三月）、第三十四号（平成二十四年三月）、第三十五号（平成二十五年三月）、第三十六号（平成二十六年三月）、第三十七号（平成二十七年三月）、第三十八号（平成二十八年三月）、第三十九号（平成二十九年三月）、第四十号（平成三十年三月）、第四十一号（平成三十一年三月）、第四十二号（令和二年三月）、第四十三号（令和三年三月）に掲載されています。また、大正大学綜合佛教研究所の助成金によって、『「モンゴル佛教史」研究〔一〕』（二〇〇二年六月、ノンブル社）、『「モンゴル佛教史」研究〔二〕』（二〇〇六年五月、ノンブル社）、『「モンゴル佛教史」研究〔三〕』（二〇一一年三月、ノンブル社）、『「モンゴル佛教史」研究〔四〕』（二〇一五年三月、ノンブル社）、『「モンゴル佛教史」研究〔五〕』（二〇一九年三月、ノンブル社）の五冊を出版しました。では、本研究会の研究内容の一部について紹介します。

旧『モンゴル佛教史』のモンゴル語版における問題点としては以下のものがあります。まず、外来語を表記するために作られたモンゴル語アリガリ文字やテクニカルタームを巡るものです。テクニカルタームのモンゴル語表記（あるいは訳）については、モンゴル語・チベット語アリガリ表記、サンスクリット還元アリガリ表記など様々な表記が見られます。その中にはある一定の傾向（あるいは法則）があり、それがこの文献の性格等を推測する手がかりになるものと思われます。また、人名等の音写語に異なる表記

が非常に多くある、という問題もあります。次に、異なる写本の存在の可能性です。チベット語版、あるいは翻訳との比較により、一致しない記述が時折出て来ます。確認を必要とする所です。

これに対して、新『モンゴル佛教史』は、現時点ではチベット語の文献等関係する文献は発見されていません。内容は、旧写本と重なる部分もあります。表記上の問題は、現時点で幾つか出てきているものがあります。例えば、現代語表記と異なる表記が規則的にされている、満州語の表記の影響がある、等です。分量としては一〇七葉であり、旧写本の半分弱です。まだ、検討を始めたばかりですが、抄訳本である可能性もあります。旧写本と比較しつつ、検討しています。

本年度の主な研究会の活動

・随時、オンライン研究会（Ｚｏｏｍ使用）

・日本モンゴル学会に一部のメンバーが参加（春季、21・5・15オンライン（Ｚｏｏｍ使用）。秋季、21・11・13オンライン（Ｚｏｏｍ使用）。

今後の予定

毎週火曜日：17時～19時位、研究会。ただし、状況によっては、オンラインにて開催。

場所：綜合佛教研究所研究室

室町期における諸宗兼学仏教の研究

研究会代表　大橋　雄人

本研究会では、室町期の仏教研究において従来あまり注目されていない諸宗兼学・融合思想を有した仏教者旭蓮社澄円（一二九〇―一三七二）の思想研究を行っている。

澄円は、八宗の教義に通じ、入元して廬山東林寺に登り、白蓮宗の優曇普度に慧遠流の浄土教を学んだ人物である。澄円は槙尾山で三部の密潅を受け、南都で登壇受戒し、天台の承遍（檀那院流）・観豪から天台教を学び、浄土教は九品寺流、鎮西流の相伝を受け、禅宗では虎関師錬との交流が確認でき、諸宗の教義を遍学していたことが知られる。また、南朝の後村上天皇の帰依を蒙り、南朝の為に奔走している。それ故、中国元代仏教の日本への影響や皇室と仏教者との関係等、南北朝期の仏教に関する新しい研究が進むことが期待されるテーマでもある。具体的には、これまで一度も活字化されていない貴重書である澄円『浄土十勝論』『同輔助義』の書誌的整理をはじめ、著者澄円伝の研究、『浄土十勝論』『同輔助義』の翻刻・書き下し文・語注の作成を行っている。澄円『浄土十勝論』『同輔助義』に関する先行研究は非常に少なく、思想史研究、書誌学研究、伝記研究のどの分野においても、これまでほとんど行われてきていない。

平成二九年度までの共同研究では、翻刻・書き下し文・語注作成を行っていたが、作業速度の効率化を図り、平成三〇年度以降、第三巻より書き下し作業のみとし、注も出典の確認のみとした。本年は作業を分担し、『補助義』を除いた全一四巻の書き下し作業を終了した。なお、本『年報』には紙数の都合上、巻上坤下（第六巻）の書き下しを中間報告として掲載した。

次年度の共同研究では、これまでに行ってきた研究作業データを再整理し、全体の成果報告に向けた準備を順次進めていきたい。

〈参加メンバー〉

代表者　大橋雄人

参加者　吉水岳彦　郡嶋昭示　舎奈田智宏　工藤量導
岩津英資　杉山裕俊　長尾隆寛　安孫子稔章
勝崎裕之　後藤史孝　春本龍彬　星　俊明
青木篤史　長尾光恵　里見奎周　小笠原紀彰

中世東国仏教研究会

研究会代表　大八木　隆祥

当研究会は中世東国仏教の実態解明を目的に発足したものであり、これまで称名寺所蔵・神奈川県立金沢文庫管理「国宝・称名寺聖教」の写本『仙芥集』（一三函―一―一～三二）の翻刻を進めてきた。

『仙芥集』は鎌倉時代、鎌倉の地で活動した真言僧・定仙（一二三三―一三〇二）の受法記録を集成したものである。

当研究会では一昨年度『仙芥集』全三十冊（写本点数三二点）の翻刻を完了した。そしてその成果は『綜佛年報』誌上に「『仙芥集』翻刻」として以下の通り順次発表してきた。

①『綜佛年報』三六（二〇一四）内容：書誌（全冊分）、一
②『綜佛年報』三七（二〇一五）内容：四・七・八
③『綜佛年報』三八（二〇一六）内容：二・三・五・六・九
④『綜佛年報』四〇（二〇一八）内容：一〇～二〇
⑤『綜佛年報』四一（二〇一九）内容：二一～二七
⑥『綜佛年報』四二（二〇二〇）内容：二八～三二

当初は写本をメンバーに割り振り、出来上がったものから順に発表したため、写本番号順の掲載ではなかった。また、七年の間に書式の不統一や凡例の変更などもあり、発表後に判明した誤読・誤字・脱字等もあった。そのため、これらを是正し、正確かつ見やすく利用しやすい完全版として出版するべく、昨年度来作業を進めてきた。

具体的には、原稿データと数度の校正を経た掲載版とを対校し、また発表後に発覚した誤読・誤字・脱字等の訂正、発表年次により異なっていた書式の統一等、原稿データの修正を行った。

これをもって本年度、綜合仏教研究所に出版助成を申請し、承認を頂いた。同書は『『仙芥集』翻刻―中世真言僧の受法記録―』と題して、本年度中に出版予定である。

本年度の活動は出版にあたっての入稿用原稿の準備と校正に終始した。昨年度同様、本年度も新型コロナウィルス流行の影響により対面での研究会開催を断念し、すべての作業は参加メンバー各自に割り振り、その成果を代表の元に集約する形で行った。

ちなみに、昨年の段階では『仙芥集』に記された膨大な人名を一覧化・人名辞典化し、翻刻出版の際には付録とすることを計画していたが、翻刻自体の分量が多い上に人名も膨大なため、もろもろの制約からこれは叶わなかった。ただ、この人名一覧が実現すれば『仙芥集』利用にあたっての利便性は大幅に向上し、多くの研究に資するものとなるはずである。しかも作業は途中まで進んでいる。よってこれについては引き続き作業を進め、いずれ何らかの形で発表したいと考えている。

仏教文化におけるメディア研究会

研究会代表　森　覚

仏教文化におけるメディア研究会は、メディアに表現された仏教文化の研究を目的として二〇一三年に発足した共同研究会である。

本年度からは、第三期目の活動を始動させており、近現代日本の娯楽メディアが生成した宗教表現を手がかりとして、民衆が日常的に接した仏教観を解明する新たな共同研究に取り組んでいる。この試みでは、「近現代日本の仏教とメディア」と「娯楽と日本仏教」という二つのテーマを設定している。それにもとづき、江戸末期から昭和期にかけての近現代仏教史にメディアが果たした実態。さらには、宗教界やアカデミズムの宗教論とは別の、娯楽性を帯びた媒体表現や事象から読みとれる、幅広い一般民衆が共有していた仏教文化とはいかなるものだったのかを明らかにすることが本研究の目指す到達点となる。

十九世紀末から二十世紀にかけての日本は、新旧のメディアが入り混じる過渡の時期にあった。前近代から存在した草双紙や錦絵、身体コミュニケーションによる歌舞伎、落語、講談などが仏教を表現する一方で、民衆は、西洋文明の接種と科学技術の発達により出現した新聞、雑誌、書籍、映画、ラジオ、絵本、紙芝居、テレビなどに取りあげられる仏教を目にする。

では新旧メディアが緩やかに共存し、連関し、交替していった近現代という時代に、仏教はいかに表現され、記録され、消費されていったのか。また、人々は、メディアの仏教表現からいかなる宗教イメージを構築し、仏教文化の形成に反映させていったのか。

こうした「仏教文化とメディア」の問題にこたえる先行研究には、島薗進・高埜利彦・林淳・若尾政希編編『シリーズ日本人と宗教―近世から近代へ　第五巻　書物・メディアと社会』（春秋社、二〇一五年）、堤邦彦・鈴木堅弘編『俗化する宗教表象と明治時代―縁起・絵伝・怪異』（三弥井書店、二〇一八年）、大谷栄一『近代仏教というメディア―出版と社会活動』（ぺりかん社、二〇二〇年）といった論考があげられる。これらの先行研究は、いずれも書籍・雑誌を中心に、宗教者や知識人の言論活動へメディアが果たした役割を論じるものではあるが、一方でメディアを通じて一般民衆が体感した仏教とは何かについてこたえた研究成果であるとは言い難い。

しかし、近現代という時代を生きた人びとは、信仰やアカデミズムなどの極めて限定的な言論空間のみに身を置いていたわけでない。だからこそ民衆の生活に散在する仏教文化に目を向ける研究が必要であり、娯楽や余暇といった場、さまざまなメディアを通じて、知識に収まらない仏教に接してきた面を無視することはできないの

である。ところが近現代の日本人に見られる仏教表現に対する接し方の多様さに比べて、同様の視点を持つ研究は圧倒的に不足しているのが現状である。そこで仏教文化におけるメディア研究会の「娯楽と日本仏教」研究プロジェクトにおいては、民衆が体験したメディア表現を足がかりとして、近世から近代における宗教表現の継続と断絶、ならびに近代仏教の展開へ果たしたメディアの役割について検証したい。

本年度の活動は、前年度に引き続き新型コロナウイルスへの感染が懸念されたため、オンライン形式での研究会を全十五回開催した。また、第三期研究テーマに関連する試みとして、研究分担者の猪股清郎氏による個人論文、および代表の森覚による第三十回仏教文化学会での研究発表。さらには、君島彩子氏、大澤絢子氏、ユリア・ブレニナ氏、マイカ・アワーバック氏が第二十九回日本近代仏教史研究会研究大会で開催したパネルセッション「表現された聖と俗―近代仏教とメディア」といった成果をあげている。

なお、来年度の研究計画としては、研究分担者による論文原稿の執筆を進め、研究成果の取りまとめに時間を費やしていきたいと考えている。

梵語仏典研究会

研究会代表　安井　光洋

本研究会は、大正大学の伝統的な梵語仏典研究を受け継ぐ研究会として、平成二十八年度より従来の「声聞地研究会」「律経研究会」「サンスクリット修辞法研究会」という三つの研究会を一つに統合して始動した。これら三つの研究会の実体は研究グループとして保持しつつ、グループ間の行き来を自由にして研究者の活動の幅を広げることで伝統的学問の継承とさらなる発展を目指して研究活動に取り組んでいる。各研究グループは引き続きの内容として次の研究活動を行った。

まず声聞地グループ（昭和五十四年度より共同研究を開始）は、第二瑜伽処から第四瑜伽処までの全四章からなる『瑜伽論声聞地』の校訂テキストと訳註を作成している。本年度声聞地写本 Ms122a1R から 123b2L までの箇所についてのシュクラテキストとの比較検討、ならび漢訳、チベット語訳との対照作業、下訳作成作業を進めた。「声聞地グループ」は、研究会参加者の状況変化やコロナウイルスの影響のため研究会の開催が少なくなった。訳注作業では、サンスクリット語写本と漢訳、チベット語訳が異なる箇所での翻訳作業に時間を要している。またこれまで出版した第一から第三瑜伽処との比較検討作業も行っており、統一された訳文の作成を行っている。時間を要する作業であるが、『声聞地』の正確な理解のために必要な作業として、今後も対照を進めていく。残す年度内に全体での検討を少しでも多く重ね、校訂研究を進展させていく予定である。

次に律経グループ（平成十四年度より共同研究を開始）は、平成十三年に出版された『チベット・ウメ字転写梵文写本集成影印版』に含まれる『律経』および『律経自註』写本の解読を進めている。今年度は、本研究会に所属している研究者がそれぞれ律について研究を進めている。米澤嘉康（大正大学准教授）による The Pravrajyāvastu of the Vinayasūtravṛtti in dBu med Script が『成田山仏教研究所紀要』第四四号に掲載された。また、平林二郎（大正大学綜合佛教研究所研究員）による「パーリ律における唱誦」が『印度学仏教学研究』第七〇巻第一号に掲載された。研究会全体の活動としては、The Third International Workshop for Guṇaprabha's Vinayasūtra の開催を企画していたが、今年度もコロナ禍の影響があり国内外の研究者を招聘するのは断念せざるを得なかった。しかしながら、個別にはオンラインで国内外の律研究者と連絡を取り合い、最新の研究成果などを情報交換した。

最後に修辞法グループ（平成十九年度より共同研究を開始）は、全五章からなるヴァーマナ（Vāmana）著『詩の修辞法の手引・註（Kāvyālaṃkārasūtravṛtti）』のローマナイズと訳註を平成二十四年度より順次、当研究年報に発表してき

た（第一章〜四章）。「［詩作への］使用について（prāyogika）」と称する第五章は、二つの課から成り、全一〇九のスートラから構成される。一七のスートラから成る第一課は「詩の慣習（kāvyasamaya）」を主題とし、九二のスートラから成る第二課は「言葉の正確化（śabdaśuddhi）」を主題としている。第五章については一通り読了したが、本章を正確に解読するには文法学の知識も要するため、パーニニ文法に関する先行研究も併読している。具体的には、Rama Nath Sarma による Aṣṭādhyāyī の英訳六巻本の読解を試みているが、研究会内に専門家を欠くため、進捗状況は捗々しくない。尚、サンスクリット修辞学に関する研究は、サンスクリット文献の厳密な解釈ならびに翻訳法の確立にも役立つことがこの一五年間の共同研究から判明しているので、インド・アーリヤ語の原典を扱う幅広い分野の研究者に積極的な参加を呼びかけるものである。尚、本研究会においても、オンライン研究会が定着しつつあるため、参加者の地理的制約が解消したことは従来と比較して好ましい点であった。

密教聖典研究会

研究会代表　駒井　信勝

本年度も昨年度に引き続き、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、綜合仏教研究所で研究会を開催することが困難なため、オンライン会議システムのズームを使用することとした。

密教聖典研究会は、平成二十八年度より、従来の密教聖典研究会と『理趣広経』の翻訳研究会とが統合され、一つの研究会となった。そのため、『不空羂索神変真言経』と『理趣広経』の二本の経典を読み進めている。以下に、今年度の研究内容について報告したい。

『不空羂索神変真言経』の研究会では、サンスクリット語校訂テキストの Preliminary Edition、および試訳を加える形式で研究成果を報告している。

平成二十九年より、『大正大学綜合佛教研究所年報』への報告を一度中断し、担当者たちが各自残りの写本をテキスト化する作業を進めている。昨年度より新たな研究会メンバーが加わったので、基礎研究としてのサンスクリット語校訂テキスト、並びに試訳の作成を本年より再開した。

現在は、一〇一葉を読み進めており、その成果は次年度に報告予定である。

『理趣広経』の研究会では、校訂テキスト作成とその読解を行っている。

研究会では既に「真言分」の第八章まで読み進めており、現在は第九章の検討を行っている。

なお、研究成果に関しては「*Śrīparamādyamantrakalpakhaṇḍa-Mahāsukhavajraguhya* Ch.2, Ch.3–」として『大正大学綜合佛教研究所年報』vol.44 に報告する予定である。

今年度の研究会も、従来とは違う開催形態となった。オンラインでの開催は、対面開催では参加が難しいメンバーとも意見交換をすることができる。このメリットを活かし、今後さらに研究会活動を充実させて、その成果を報告していく所存である。

仏教史料研究会

研究会代表　石井　正稔

当研究会は歴史学の立場から古文書や古記録といった仏教関係史料を取り扱い、研究を進めることを目的とした研究会である。

研究会メンバーは次の七名である。

・石井　正稔（綜合仏教研究所研究員　研究会代表）
・濱田　由美（綜合仏教研究所研究員）
・櫛田　良道（大正大学専任講師）
・藤田　祐俊（大正大学講師）
・風間　弘盛（真言宗豊山派宗学研究所研究員）
・熊野　秀一
・加瀬　丈舜

主な活動内容は、平成二八年九月に調査を実施した真言宗豊山派金乗院（千葉県野田市清水）の史料調査および内容の整理作業を進めている。

金乗院は、応永五年（一三九八）の開基と伝えられ、近世期には本寺と檀林の寺格を有し、近隣寺院を統括していた。そうしたことから、同寺には、檀林・本末関係などを示す史料群が多く残されている。同寺の蔵には古典籍を含む史料が多く収蔵されているが、これら金乗院所蔵史料は市史や県史などにも収められておらず、未整理の状態である。

活動内容として、引き続き『大衆帳（交衆帳）』に着手している。

研究会の立ち上げ当初より着目していた史料の一つである『大衆帳』は、文政年間（一八一八～一八三〇）の本山との交衆に係るもので、論議（報恩講）が実施される度に作成された名簿である。一覧すると、法臘の浅い者が年を重ねる毎に上座へと昇っていき、やがては名簿上から名前を消していることがわかる。同様に、上座にいて名前が消えた者でも、一定の期間を経ると再び名前が記載されており、そうした内容から金乗院を拠点とし在地において活動した僧侶の様子を垣間見ることができる。

まず、作業として『大衆帳』のデータ入力を研究会メンバー全員で分担しておこなってきた。担当者および担当箇所は次の通りである。

・石井　画像データ No.537～570
・熊野　画像データ No.571～618
・濱田　画像データ No.619～658
・加瀬　画像データ No.659～696
・久保田　画像データ No.697～737
・風間　画像データ No.738～764
・藤田　画像データ No.765～790
・櫛田　画像データ No.791～808

入力作業は既に終了しており、データを統合しメンバー全員で解読できなかった文字を読み説いていく等の確認作業をおこなっている。

石井・熊野が担当したデータの確認作業まで一旦終了し、紙面掲載の準備を進めている。準備するにあたり、入力したデータの凡例等を定めること、そして史料の性質を理解するために、『大衆帳』の書誌的概要の必要性も感じている。

令和三年度も、昨年度と同様に新型コロナウイルスの影響を受け、研究会の活動が満足にできない状況が続き、これまで作業してきた翻刻箇所を各自で再確認する作業のみに留まっている。

次年度は、早急にそれらの問題を解決し、年報等の紙面に掲載し、成果として発表できることを目指していく。

更に、取り扱っている史料の性質上、寺院の本末関係・檀林制度・移転寺制度といった近世新義真言宗史の実態についての理解を深めておかなければならない必要がある。そうした知識の向上を図りながら研究会を進めていきたい。

頼瑜撰『真俗雑記問答鈔』訳注研究会

研究会代表　小宮　俊海

『真俗雑記問答鈔』は、新義真言教学の祖と称される中性院俊音房頼瑜僧正（一二二六～一三〇四）が、その時々に記したものを集成した著作である。その内容は一千三百二十余条にのぼり、書名のごとく真言密教や仏教諸宗に関わる事項はもとより、頼瑜自身の夢記や和歌、さらには公家に対する修法や諸家との書簡、和歌論や世典に関する記事など、その内容は実に多彩である。一人の真言僧侶による教学的著作の域を超え、中世を生きた頼瑜の人物像、さらには当時の宗教文化や社会状況までをも窺い知ることのできる貴重な資料といえよう。

本書は古来より三十巻・二十四巻・十一巻など種々の説があり、また写本によって巻順の移動や内容の増減が著しい。すでに『真言宗全書』第三十七巻に、高野山南院松永宥見師蔵写本を底本とし、二十七巻本の体裁をもって活字化されているものの校訂テキストとして未だ不十分とされる。

そこで本研究会は各所の諸写本を聚集し校訂し、なかでも巻数の揃った最も古い写本である智積院新文庫蔵本を底本として【本文】を作成し、条目ごとに【校勘】【訓読】【注釈】【解説】を施している。

今回報告するのは、新文庫蔵本全二十五冊のうち、整理番号・新文庫三一―四―（二五―二）に相当する一冊の中間部分（一三丁裏～一七丁裏）である。本書は、外題に「真俗雑記巻四」とあり、内題は「秘蔵口伝鈔第四」とある。これらも勘案し、本書を「巻第四」と定め、今回報告する中間部分を仮に「巻第四ノ四」とした。

巻第四ノ四に収録される条目は次の通り。

八八、一生成仏可具十六菩薩部徳事
八九、二教論息化城之賓文今此賓可云小乗人耶
九〇、舎利種子三形事
九一、斎月斎日事
九二、善悪夢見之時誦咒事
九三、庚申之夜誦頌事
九四、鼻曳時頌事
九五、諸寺長吏三網所司事
九六、七僧事
九七、奈良七大寺事
九八、命終之時可知当生五趣不同事

本年度は以上、十一の条目について各担当者を振り分け、研究会において本文校訂ならびに訳注研究を進めることができた。今後も次年度以降引き続き訳注研究を進め、「巻四ノ五」を順次発表刊行予定である。

近世唱導文芸研究会

研究会代表　平間　尚子

本研究会は、大正大学図書館に所蔵される近世の唱導関連文献を対象として、翻刻を行ない、唱導資料の読解、および引用された文献資料の流布や展開などを研究している。

研究会における当面の目標は、『類雑集』を広く学界に紹介し、また翻刻などを通じた研究成果を報告することである。

『類雑集』は、近世に編纂されたと考えられている唱導資料で、版本は、つぎの二点がある。

一点目は、「慶安四年〈辛卯〉暦十月吉辰　石黒庄太夫板本」の奥書を有するもので、二点目は、「明暦三年〈丁酉〉三月吉辰　秋田屋平左衛門板行」の奥書を有するものである。どちらも、全十巻および総目録一冊の計十一冊で、同じ版木を用いて刷られている。版本は、大正大学以外にも所蔵されているが、翻刻はなされていない状況にある。このように、活字化されていない『類雑集』の翻刻作業を行ない、その出典を明らかにすることは、唱導分野の研究の進展にも寄与できるといえよう。

本研究会では、平成二十三年度から『大正大学綜合佛教研究所年報』に、一巻ずつ翻刻を報告してきた。翻刻作業とともに、引用文献の調査ならびに校合を実施し、『大正大学綜合佛教研究所年報』には、脚注に典拠名と校異を示している。また、資料の状態を忠実に再現するために書き入れの場所や内容についても詳細な指摘をしている。

今年度は、総勢八名の会員を中心に研究会を運営し、『類雑集』研究の総まとめとして、昨年に引き続き、巻一～巻四の出典未詳箇所の再調査を行なった。

研究会では、『類雑集』の翻刻のほか、引用された文献資料に注目して、『類雑集』出典研究も進めてきた。今年度は、巻八に収載されている「術婆伽（じゅつばか）説話」に焦点をあてた。術婆伽説話は、『大智度論』を出典として、経典類・説話・和歌・注釈書類と、幅広い流布が認められる作品である。本説話についての先行研究は多数あるが、『類雑集』の「術婆伽説話」について触れられているものはない。調査を進めると、「恋」について、「病」と捉える作品、「破戒」と捉える作品、翻って「神を導くもの」と位置づける作品があることが明らかとなった。また、「恋」の捉え方について『類雑集』と『宝物集』には「病」と「破戒」の両者と捉える記述が認められ、二作品には共通点がある。

先学により『類雑集』は日蓮宗関係寺院圏内で用いられていたことも指摘されている。こうした先行研究を参考にしつつ、「術婆伽説話」以外にも、徹底して資料を読み解くことで、『類雑集』をはじめ近世における唱導書のあり方の一端を紐解くことが期待できると考えている。

来年度は、『類雑集』巻五～十の出典未詳箇所について再検討をしたり、『類雑集』の総合的な出典研究の報告を行なっていく所存である。

大乗経典思想研究会

研究会代表　伊久間洋光

（概要）

本研究会では昨年度に引き続き、大乗仏教における最も重要なテキストの一つである大品系般若経のうち、古形を保ちながら未だ全体の研究がなされていないGilgit 写本般若経（Gilgit manuscript of the *Larger Prajñāpāramitā*）を読解している。既に校訂のなされた大品系般若経のサンスクリットテキストにはネパール系『二万五千頌般若』があるが、後世の論書の影響を受けて構成が改変されており、完全に古形を留めているとは言い難い。然るに本研究会において、Gilgit 写本般若経の全体像を解明することで、論書の影響を受けていない大品系般若経サンスクリット本が初めて明らかになる。そのことから、本研究会の成果は、鳩摩羅什訳『摩訶般若波羅蜜経』（別名『大品般若経』）をはじめとする大品系般若経の漢訳諸本および『大品般若』を注釈対象とする『大智度論』の新たな研究基盤となろう。

本研究会では、Gilgit 写本般若経の transliteration に際し、同経典と緊密な対応関係を有するサンスクリット本『十万頌般若』の並行箇所と対照することにより、写本の正確な読み、再構成が可能となっている。さらにチベット語訳『十万頌般若』デルゲ版『大般若波羅蜜多経』初会のロケーションを記載することにより、拡大般若経の包括的研究を視野に入れる。

また本研究会はブラーフミー文字写本（Gigit/Bāmiyan Type I, 丸形グプタ文字）を読む貴重な機会であり、写本研究に関心のあるメンバーの参加を期待する。

（進捗状況）

今年度は月一回オンライン研究会を行っている。

役割分担として、玉井達士博士と伊久間が予め写本の解読を行い、全体研究会で難読箇所の検討を行っている。また Gilgit 般若経の folio 毎に、伊久間・鈴木健太教授・庄司史生准教授が、それぞれサンスクリット本『十万頌般若』・チベット語訳『十万頌般若』デルゲ版・『大般若波羅蜜多経』初会並行箇所のロケーション同定を行っている。また張美僑氏・宮崎展昌准教授が鳩摩羅什訳『大品般若経』の読み・句読点を提示している。

今年度は昨年度公開した箇所の後、鳩摩羅什訳第五―八章（竺法護訳第四―七章）に相当する fols. 38r-53r の transliteration を、『大正大学綜合佛教研究所年報』vol.44 に報告する予定である。

鎌倉仏教人師の伝記資料研究

研究会代表　安孫子　稔章

本研究会は、浄土宗二祖である聖光上人（以下、祖師の敬称を省略）の伝記の翻刻作業を通じて、聖光の生涯と思想について考察し明らかにすることを目的とする。

今日聖光の生涯について論じる際には、弘安一〇年（一二八七）に道光の手により成立した『聖光上人伝』を第一資料としている。他にも、聖護房作とされる『鎮西略要伝』（一二九〇）と『法然上人行状絵図』第四六巻（一三一一～一三二三）の二本が聖光伝として現存し翻刻されている。ただし、各伝記間で内容に相違があることも明らかになっている。例えば、聖光が異母弟である三明房の突然の悶絶に遭うということが聖光の思想形成に大きく関わるとされているが、聖光と三明房との関係性や、その後に関する記述が伝記によって異なることが指摘されている。聖光は法然から受け継いだ浄土宗の法灯を三祖良忠へとつなぎ、後の教団発展に寄与した重要人物であるにもかかわらず、その生涯については未解明の部分も多いといえる。

聖光伝としてこの他に以下の二文献が現存しているが、翻刻されていない。

・『鎮西禅師絵詞伝』一八巻、天明四年（一七八四）風航了吟作、和本のみ現存

・『大紹正宗国師伝略』一巻、文政一一年（一八二八）順阿隆円作、和本のみ現存

文政四年（一八二一）に信冏が註記等を補って再版した『聖光上人伝』の序では、ここに挙げた『鎮西禅師絵詞伝』は根拠のない説を追加し、偽りを伝えるものであるとされている。このように、後代の伝記は信憑性にかけるということを理由として、これまで聖光の生涯について研究する上で中心的テキストとして取り扱われることは少なかった。しかし、先述したように聖光の生涯については未解明の部分も多く、先学の指摘を踏まえた上で、後代のものとされるこの二本の伝記と『聖光上人伝』等の諸伝記との比較検討によって、聖光の生涯についてより明確にすることができると考える。また、聖光の生涯を明確にすることは思想の解明にもつながり、さらには浄土宗学研究にとって大きな進展があると期待できる。

よって、本研究会では『鎮西禅師絵詞伝』一八巻と『大紹正宗国師伝略』一巻を翻刻し、これらを『聖光上人伝』等の諸伝記と対校することを当面の研究方法とする。

今年度は、『大紹正宗国師伝略』の翻刻に着手し、九割方の作業を終えた。残念ながら今年度の中間報告には間に合わなかったが、次年報には掲載できる予定である。来年度は『鎮西禅師絵詞伝』の翻刻を進めていく。こちらは一八巻と大部であるため、翻刻作業と並行して順次諸伝記との対校作業や、資料についての書誌学的考察も進めてい

きたいと考えている。また、現在は翻刻作業において原文のデータ化のみを進めているが、今後は註において出典や重要用語の解釈等を施していくことも考えている。

今年度はコロナ禍のため対面での研究会は開催せず、すべてZoomを利用したオンライン研究会とした。本研究会所属メンバーは浄土学研究者が中心であるが、和本を読むことに慣れていない者も多く、まずは和本読解の知識を得ることからスタートして、皆ようやく慣れてきたように感じている。新設の研究会であり、研究発表はいまだ行っていないが、今後は『聖光上人伝』等の他伝記や法然の思想との関係性などについて発表を行っていきたい。

【研究会メンバー】

代表者　安孫子稔章

参加者　郡嶋昭示　長尾隆寛　前島信也
　　春本龍彬　長尾光恵　青木篤史
　　里見奎周

The Development of the Concept of Mirror and its Reflection

研究会代表　房　貞蘭

A mirror could be regarded as one of the most significant discoveries and inventions through human history. The mirror had enabled people to see themselves. On the one hand, people observe a reflected image on the mirror as an unreal thing since it is apparently separated from the object. On the other hand, the function of the mirror, reflecting any object in front of it, has been described as a useful metaphor for that how people perceive the world. Moreover, the mirror is in practice utilized in traditional rituals as a symbolic object in Asian culture.

First, we can see that the history of Indian thought has developed the understanding of 'a mirror (*ādarśa*) and its reflection (*pratibimba*)' in various ways through the extensive Indian classical texts. For example, one of Sanskrit words for the mirror is *ādarśa*, derived from the causative form of a verb-root ā√dṛś (to look at). Its basic meaning is 'showing'; therefore, it implies a mirror's function, reflecting. However, another word for the mirror, *darpaṇa*, derived from the causative form of a verb-root, √dṛp (to light and to be foolish). That is to say, we can notice that this word emphasizes the mirror's function of causing illusions. In such manner, Indian classical texts contain the various view of mirror and its reflection.

For the first research step of our group, we have started to investigate how rites using with mirror and its reflected image developed in Vajrayāna and Śaiva traditions. Furthermore, in the *Tattvajñānasaṃsiddhi*, one of the Saṃvara literatures, written by Śūnyatāsamādhivajra (or Śūnyasamādhivajra), we could find another interesting feature of using a mirror in the Vārāhī sādhanas. Therefore, we started to produce critical editions of commentarial treaties on the *Tattvajñānasaṃsiddhi* and annotated translations through regular reading sessions.